

2023 年度

日本植物分類学会 講演会

2023 年 12 月 9 日 (土) 午前 10 時～午後 5 時

大阪学院大学 2 号館地下 1 階 2 号教室 (02-B1-02 教室)

(最寄り駅：JR 岸辺駅 / 阪急 正雀駅)

ハイブリッド形式 (現地およびオンライン配信)

講演スケジュール

10:00-10:10 ご挨拶 村上 哲明 (学会会長 / 東京都立大学)

10:10-11:00 佐藤 博俊 (京都大学)
「ハラタケ綱菌類の種多様性の起源」

11:00-11:50 山尾 僚 (京都大学)
「身近な雑草から探る植物の柔軟な生きざま」

(11:50-13:20 昼食)

13:20-14:10 渡邊 誠太 (大阪公立大学)
「ユリ属は面白い！ - 系統分類からわかったこと -」

14:10-15:00 廣田 峻 (大阪公立大学)
「東アジアで多様化したキスゲ属」

(15:00-15:10 休憩)

15:10-16:00 村上 哲明 (東京都立大学)
「牧野富太郎博士が遺した植物標本と
日本の植物分類学への貢献」

16:00-16:50 岡崎 純子 (大阪教育大学)
「島嶼環境に直面した広域分布種の送粉生態型分化」

16:50-17:00 ご挨拶 林 一彦 (大阪学院大学)

17:00- 懇親会



H. Sato



R. Yamawo



S. Watanabe



S. Hirota



N. Murakami



J. Okazaki

参加申込：<https://forms.gle/WYjdkzZLEgrou2xGA>

* 日本植物分類学会の非会員の方のご参加も歓迎します。

* 参加者多数の場合は、早期に受付を締め切らせていただく場合があります。

* 開催方法が変更になる場合は、登録メールアドレスに 2023 年 12 月 7 日までに連絡をいたします。

* お問い合わせ：講演会担当 高山浩司 (takayama@sys.bot.kyoto-u.ac.jp)



ハラタケ綱菌類の種多様性の起源

佐藤 博俊 (京都大学)

いわゆるキノコ類で主に構成される担子菌ハラタケ綱は、陸上生態系に広く適応し、種多様性の高い菌群として知られる。本研究では、分子系統学的なアプローチを用いて、ハラタケ綱菌類の種多様化の進化的起源を調べた。解析の結果、ハラタケ綱菌類の急速な種多様化は、白亜紀後期に5つの系統群で同時並列的に起きたことが示された。また、種多様化の生じた時期は、5つの菌群が外生菌根性（樹木との根系での相利共生関係）を獲得した時期とほぼ完全に一致した。以上の結果から、ハラタケ綱菌類は、白亜紀後期に出現したブナ目など外生菌根性の被子植物と共進化して外生菌根性を獲得したことがきっかけで、急速な種多様化を果たしたという可能性が浮かび上がってきた。

身近な雑草から探る植物の柔軟な生きざま

山尾 僚 (京都大学)

街中や野山で何気なくみかける植物たち。ただ静かにそこに生えているだけのように思える。しかし、植物たちは刻々と変化する様々な環境に対して、密かに、そしてダイナミックに反応している。演者は、身近な植物であるヤブガラシやオオバコを用いた実験から、植物が自己・非自己や他個体の遺伝的類似性を識別し、多種多様な応答を示すことを明らかにしてきた。本講演では、演者の研究と共に植物の環境応答の多様性について紹介し、植物が備える多様な他個体認識システムについて考えてみたい。

ユリ属は面白い！ - 系統分類からわかったこと -

渡邊 誠太 (大阪公立大学)

ユリ属は、ユリ科の多年生草本で、北半球に約117種が分布する。野生種でも華やかな花をつけ、花の形、色、咲く向きなど実に多様である。その美しさもあり、ユリ属は分類学者だけではなく、園芸家によっても分類研究が行われてきた。しかし、その“わかりやすさ”とは逆に、ユリ属の分類は混乱してきた。今回は、その歴史を振り返りつつ、新たに提唱した節（＝属内分類の一つ）認識や、そこから明らかになった興味深いことについて紹介する。また、東アジアのユリ属については、まだ分類学的問題が山積しており、特に観賞価値が高く、古くから注目されてきた日本産ユリ属の研究についてもお話ししたい。

東アジアで多様化したキスゲ属

廣田 峻 (大阪公立大学)

被子植物の多くは送粉者と呼ばれる動物によって花粉を運ばれる。そのため、花は訪花する送粉者の特徴に合わせて、効率的な誘引と花粉の受け渡しができるよう自然選択を受けてきた。そして、異なる送粉者に適応することは花形質の分化と生殖隔離の両方をもたらす、種分化に繋がると考えられる。キスゲ属には、アゲハチョウやハナバチ、スズメガなどの送粉者を利用する種が含まれ、それぞれ花色や開花時間などの花形質が異なる。そのため、キスゲ属は送粉者との相互作用を介した種分化の研究に理想的な材料である。本講演では、東アジア各地から採集したサンプルを用いた分子系統解析や、送粉者を用いた訪花実験など最新の研究成果をもとに、キスゲ属の種分化について紹介したい。

牧野富太郎博士が遺した植物標本と日本の植物分類学への貢献

村上 哲明 (東京都立大学)

NHKの朝ドラマ「らんまん」の主人公モデルでもあった故牧野富太郎博士は、明治～昭和にかけて、日本各地で植物標本を網羅的に採集された。その多くが今から100年以上前に採集された博士の標本は学術的にとても貴重なものである。博士の標本は絵画のように美しく作られていて、鑑賞にも十分堪えるものであることは特筆すべきである。また、博士は熱心に植物愛好家の指導・育成をされた。これが現在、日本各地に植物研究会があり、多数のノンプロの植物研究家がいらっしやることに繋がっている。このことは、1,500もの日本の植物に学名を着けて発表したことに匹敵する、牧野博士の植物分類学への大きな貢献である。博士の遺された植物標本とその貢献についてご紹介したい。

島嶼環境に直面した広域分布種の送粉生態型分化

岡崎 純子 (大阪教育大学)

種分化研究において島嶼環境は繁殖特性の進化要因の解明に適した場所となっている。特に伊豆諸島は海洋島でありながら本土に比較的近く、固有種や固有変種群を用いた自殖性進化の良い研究がされてきた島嶼である。日本列島において多様な環境に生育する広域分布種達は、たとえ島嶼で明瞭な形態的分化がみられない種群であっても、その侵入・定着の過程では種子分散や花粉分散といった遺伝子流動の制約に直面し、それに適応してきた歴史を持っている。特に外交配植物にとって花粉分散に関わる訪花昆虫相の変化は子孫を残すためには重大な問題であり、送粉生態型分化を起こしている場合がある。本講演では広域分布種ツリガネニンジン（キキョウ科）が伊豆諸島で夜から昼へと利用する訪花昆虫をシフトさせ、これに対応した繁殖特性をもった送粉生態型の分化について得られた知見を紹介したい。